

# 日本子ども学会 News Letter No.1

2010年9月14日発行  
日本子ども学会事務局

## 第7回子ども学会議開催のお知らせ

現在さまざまな困難に直面する子どもたちが増えてきています。従来から子どもの課題は存在していますが、近年若年層の親たちの生活の困窮にともない、子育ての負担感が強まり、虐待などに見られるように課題が深刻化するケースが目立っています。

日本子ども学会では「子どもサポートの統合 ～危機にある子どもたち～」というテーマで、10月2日、3日に第7回子ども学会議を開催します。大会推進委員長の明海大学渡部茂教授は、小児歯科が専門ですが、子どもを長期的・定期的に観察できる立場にあることから、歯の健康だけにとどまらず、現在の子どもたちや子育てが抱えるさまざまな課題にも向き合いたいと考えています。

教育、医療、保健、福祉など、各領域の専門家が連携を取るためには、まずは専門の違いではなく、共通点に目を向け、問題意識の共有化をはかることが重要です。今回の学術集会には、日本子ども学会の会員の方だけではなく、一般の人々も含めて、できるだけ多くの人々に、ご参加いただきたいと願っています。ご参加およびお声かけのほどよろしくお願い申し上げます。

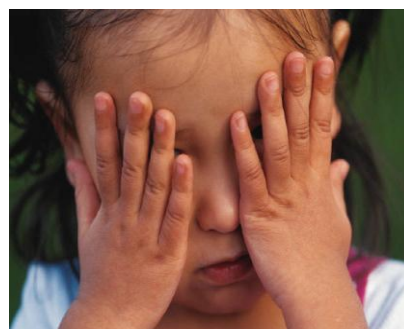
○開催日：10月2日（土）、3日（日）開場9時

○会場：川越市市民会館

※ 詳しくは日本子ども学会のHPをご覧ください。  
<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU/act>

### ■シンポジウムのテーマ

子どもを煙害から守る／発達障害・自閉症をめぐる  
／子どもの虐待／子どもの傷害予防／子どもの貧困



### ■特別講演

「保育と子どもの発達」サラ・フリードマン（CNAパブリックリサーチ研究所）

サラ・フリードマン氏は、アメリカ NICHD による養育環境と子どもの発達に関する大規模コホート調査の責任者であり、保育の役割について貴重な提言を行っています。また、現在は母親の養育に対する支援と子どもの発達との関連についての研究を展開しています。

「歯と口の保健と子どもの成長」高橋裕三（東京医科歯科大学教授）

身体のすべての組織・器官は互いに影響しながら調和の取れた成熟に向かいます。口腔領域も例外ではなく、それらは全身の発育・保健に大変大きな役割をもっています。乳幼児期の五感の発達、言葉の構音器官としての役割など、注目されることが少ない口腔器官と発達の関係について紹介します。

## 第 1 回理事会報告

新しい理事の方々による、5月に第1回理事会が開催されました。初めての理事会ということもあり、理事の先生方からは、今後の学会のあり方について、貴重なご意見を数々いただきました。

日時：2010年5月15日

場所：お茶の水女子大学生生活科学本館カンファレンス室

出席者：理事27名、顧問1名

### ■報告事項

- 1) 会員の内訳：現在の会員数448名。賛助会員14名。分野としては、教育系、医学・看護系がともに2割を超え、幼児教育系、心理学系、福祉系と続く。その他、子どもの研究者でない方も1割以上参加されています。
- 2) 規約：規約を検討し、改定している段階。理事については、旧運営委員から推薦をする形で選出しました。将来的には理事を会員の中から選ぶ形になるが、現在は過渡期と捉えています。
- 3) 広報：ニュースレターは年2回発行。ホームページは10月にリニューアルする予定で、プレス関係の広報にも力を入れていきます。
- 4) 学術集会：第8回大会は、武庫川女子大学教授の河合優年先生に大会推進委員長をお願いし、同大学を会場に実施する予定。テーマは「少子化時代の子どもたち～環境の変化と未来の姿～（仮）」とし、育児、教育、環境を科学的に検証します。
- 5) 決算：10月の総会での承認後、会員の皆様にはニュースレターで報告します。
- 6) 啓発活動：マルチメディアの形式で、子ども学事典の作成を目指す。

### ■理事からのご意見（一部）

- ・学会は学術的なものと、外にアピールするものがあるが、子ども学会は後者を目指してほしい。
- ・子どもをキーワードに、専門を超えて研究者が連携するための母体、共通のプラットフォームを作ってほしい。
- ・年に1回の学術集会だけではなく、間の期間にももっと活動をしてほしい。
- ・話を聞くだけという場が多い。参加者が考えを表明できる場を増やしてほしい。
- ・会員資格に「本会の趣旨に賛同し、研究活動や交流活動を通して、その発展に寄与する意思のある個人」とありますが、すばらしい定義だと思う。会員というのは、サービスを受ける側ではなく、サービスする側なのだという発想の転換が必要なのではないか。
- ・国際学会では最近「Meet the Expert」というプログラムがある。参加者と専門家が会食するような試みもあっていい。



## 新理事のアンケート紹介

第1回の理事会の際に、新理事の先生方から貴重なご提案をいただきました。さらにアンケート調査を行いましたので、回答の一部をご紹介します。

◆関連学会が、まずは情報交換を密にして、たとえ隔年でも、オリンピックイヤーでも、連携して相互交流し、大同団結するのが大切かと思います。研究奨励賞や論文賞も考慮されるとよいでしょう。また、そうした客観的で正統な評価を重く受け止める風土の醸成も重要でしょう。

(京都大学霊長類研究所長 松沢哲郎)

◆私自身は、コミュニケーション工学の立場からバーチャル・リアリティなどの映像技術、コミュニケーション・メディアとしての顔学などに関心をもってきました。「子どもと遊び」「子どもとメディア、地域社会」「子どもの顔」などについて勉強する機会があれば参加させていただきたいと思っています。

(東京大学名誉教授 原島 博)

◆特定の学問領域の研究者だけではなく、子どもに関心のあるさまざまな領域の研究者や子どもをめぐる実践家が集い、子どもが生きる現場に直結した発信をしていくところが、他の学会とは異なる点だと思います。社会の子どもの課題を解決していくには、「マスコミでの発信」「内閣府への政策提言」「子育てについての啓蒙書の出版」「子育て支援の講演会やワークショップの開催」などが求められます。

(お茶の水女子大学教授 内田伸子)

◆大人になることの意味が時代や文化によって異なってきています。インターネットにより子どもが大人以上の情報を持ち、今までとは異なる世代間伝達が行われています。そのように、親役割が時代によって異なり、それが親自身の育ちに異なる影響を与え、子どもと大人の関係性を変えています。また、国際結婚家庭や外国籍の子どもが地域や学校、保育現場に増加していく中で、必要とされる社会的スキルが変わってきています。

学際性が子ども学会のよいところだと思うので、さまざまな問題を取り上げることは必要です。しかし、単なるトピックのおもしろさだけにとどまらず、各領域の理論的な部分についても押さえていく必要があります。

(同志社女子大学教授 塘 利枝子)

◆テーマとしては、子育て、しつけ、教育（学校教育にとどまらず）といったものかと思ひ浮かびます。既にいろいろな領域で研究がなされているテーマですが、「子ども学」ならではの切り口はないのだろうかと考えたり、逆にそのような切り口から「子ども学」のアイデンティティが見えてくるのではないかと考えたりもします。

重要なのは、学会がいくら大きくなろうと、皆が集まる場、討論する場はできるだけ一つに絞り、共通の問題に対して、多様な領域から丁々発止の意見が飛び交うようなものにしていくことではないかと思っています。

(白百合女子大学教授 宮下孝広)

◆脳性まひをもった子どもたちが社会参加をする際に、障壁となるものの一つが、運動機能が改善されれば、将来自立した生活や社会参加が可能になるといった幻想的な文脈の存在です。そのためリハビリテーションの考え方が訓練至上主義になっていて、障がいをもった子どもが大人になっていくためのプログラムが示されていません。

例えば、子ども事典の中に1) 障がい児・余暇活動・地域で検索すると NPO などを行っている活動にリンクし、プログラム情報が入手できる。障がいの程度に合わせた健常児とのインクルーシブなプログラム情報が入手できる。2) 障害児・登山・支援機器で検索すると、改造された背負子の画像や改造方法・使用の様子コメントがわかるなど、障害のある子どもたちの情報も入るといいと思います。

(びわこ学園 高塩純一)

◆子ども学会は「子ども」をキーワードにして、「情報発信」に焦点を当てて、学問や専門分野の呪縛を超えてバウンダリーレスに行動するべき。また、Web を充実化させて、実務家と一般家庭の会員を増強し、会費を下げて社会的な認知度を上げて、社会貢献を進めてはどうか。

子どもの課題を解決するためには、「社会の子どもに関するさまざまな分野の事例やエビデンスを蓄積する子ども学研究コーパスを構築する」「子どもに関する一般向けの頼りになる成長する子育てコンテンツを開発する」などが考えられます。

(静岡大学教授 竹林洋一)

## 「チャイルド・サイエンス Vol.7」投稿論文原稿募集

日本子ども学会では、学会誌「チャイルド・サイエンス VOL.7」に関して、以下の二つのジャンルの投稿原稿を募集します。投稿時には論文の種別を明示してください。なお、査読の過程で論文内容に即して種別の変更をお勧めすることがあります。

- 1) 「研究論文」：いずれかの専門領域の理論と方法を背景としつつ、子どもに関する学際的な研究をまとめたもの。10000 字以内かつ刷り上り 5 ページ以内(図表含む)。
- 2) 「研究ノート」：子どもをめぐるさまざまな事実や状況を検討して研究の課題を提示したり、問題領域や方法が未成熟であるが、子ども学として確立していくべき研究の方向性を示したりする萌芽的な研究や展望、提言など。8000 字以内かつ刷り上り 4 ページ以内 (図表含む)。

※執筆要項は日本子ども学会の HP でご確認ください。

<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU/book/ask>.

○投稿資格 単著の場合は著者本人が、共著の場合は筆頭著者が日本子ども学会の会員であること。

○採否 編集委員および査読担当者の審査によって決定します。

○締め切り **2010 年 10 月 20 日必着**

○発刊日 2011 年 3 月末日

○送り先 日本子ども学会編集部 [kinoedit@ybb.ne.jp](mailto:kinoedit@ybb.ne.jp)

